

ぼる。一方、若干ながら出土した須恵器は7世紀末～8世紀中葉のもので、8世紀後葉～9世紀前半の空白期があることは否定できない。土師器甕も同様で、典型的なL字形の屈曲をみせる三河型の長胴甕は確認できず、先行するハケ調整甕や、直線的な口縁が斜めに立ち上がるK-90号窯期にみられるタイプのものが清郷型に混じって散見される。

のことから、加原遺跡の古代集落は前後2期に区分され、一部が石座神社遺跡東端にまで及ぶ前者と平安時代中期の後者が不連続に存在することが示される。

## 第2節 古代末期～中世初頭の土師器鍋

**加原遺跡の土師器鍋** 遺物【第3章】で提示したように、加原遺跡の12世紀代にかかる遺構を中心とする清郷型と呼ぶ多数の土師器鍋が出土しており、その量並びに内容から当該遺跡を特徴づける遺物である。本節ではこの清郷型鍋を中心に、胎土分析【第4章第1節】の成果も交えて古代の土師器煮炊具について考察し、遺跡の評価につなげていきたい。

**三河型甕と清郷型鍋** 尾張・三河地域において、竈を付設した竪穴建物で構成される奈良時代から平安時代前期の集落遺跡では、供膳具たる須恵器・灰釉陶器と並んで土師器煮炊具が土器の主体となる。煮炊具は竈に固定されるための器壁の薄い長胴甕と移動可能な小型甕の2態が基本形である。その類型は尾張地域では濃尾型、三河地域では三河型と旧国域を分布域とする特徴も備えている。特に三河型甕は最終器面調整に徹底したナデを行うこと、横方向に明瞭に屈曲する口縁部を指標とする。加原遺跡は三河国域にあるので三河型甕が卓越している地域に該当するが、先述【前節】したように加原遺跡の古代集落は平安時代中期以降に主体があるため、三河型甕はわずかしか出土していない。

三河型甕については、豊田市・水入遺跡の報告において若干の考察を行い、その生成過程について見通しをたてた〔愛知県埋文セ2005〕。それは、器壁の薄さを最優先指標とするならば、その登場は西三河地域で先行し、東西両三河地域で定型化をみるのは8世紀半ばというものである。またその際に実施した西三河地域出土資料の胎土分析成果では、器形の共通性もさることながら、特定の淡水性珪藻の化石が材料粘土中にあることを多くの試料で確認することもでき、沼沢地周辺という環境で集中的に生産がなされた可能性を指摘するに至った。そしてその生産地はおそらく先行した西三河地域の中に存在する可能性を提示した。一方、清郷型鍋（水入遺跡報告時には「後期三河型甕」と呼称）は、これと異なる胎土組成を示し、それ独特の共通性を有していることが考えられた。

その見通しから10年を経た今回、東三河地域の遺跡出土三河型甕と伊勢湾岸地域出土の清郷型鍋からそれぞれ試料を得て同じ視点で胎土分析を実施した。先述【第4章第1節】したように、(1)三河型甕の東西両地域間での差異および東三河地域内での時期的変化と、(2)各地域出土清郷型鍋の形態的共通性と胎土組成との関連、の2点を主眼とすることで先の見通しを検証する基礎データを得ることを目的とした。

**三河型甕の分類** 三河型甕については北村和宏の分類〔北村2000〕と西尾市・寄名山遺跡での分類〔三田2008〕、豊川市・国分寺北遺跡での分類〔平松2012〕がある。北村は、清郷型鍋が三河型甕の系譜を引くという理解のもとこれらをまとめた「三河型甕」を設定し、口縁形状からA～G類に分類した。この分類はそのまま時間軸上に組列され編年の位置づけとなった。また寄名山遺跡・国分寺北遺跡の分類はともに各遺跡内出土資料を口縁形状によって分類したもので、より詳細な分類をおこなっている。ただし基本的な形態変化の方向については北村の分類を踏襲したものといえる。

本節では、三河～尾張国域を中心とした地域を時期別に通覧する立場から、定型化以前も含めて4つに分類する【図63】。三河型甕として最も知られた形状はB類の段階であるが、器壁が薄く、口縁

部の屈曲が明瞭になる段階を三河型甕の登場と位置づける。その前段階は口縁形状や厚さもさまざまある（前三河型）。東三河地域では前三河型の段階から三河型A類の間は最終器面調整がハケでとどまっていることが多い。次いでB類では口縁部の鋭角的ともいえる屈曲と指ナデ仕上げおよび白色系の色調となり、西三河地域のものと見分けがつかなくなる。そしてC類では口縁部屈曲が斜め上方に変化し、端部の面取りが顕著になる。口縁屈曲部を中心に器壁が厚くなる傾向もみえてくる。これは、A・B類段階では土を固めた造り付け竈構築時に固定していたものが、C類段階でそのような竈に限定されなくなったことも関係していると考えられる。同時に胴部長が短くなり鍋に近い形へと変化している。しかしC類では明らかに浅めの鍋形も存在しており、これは竈固定用の甕に対して別の形態を用意したものと考えられよう。

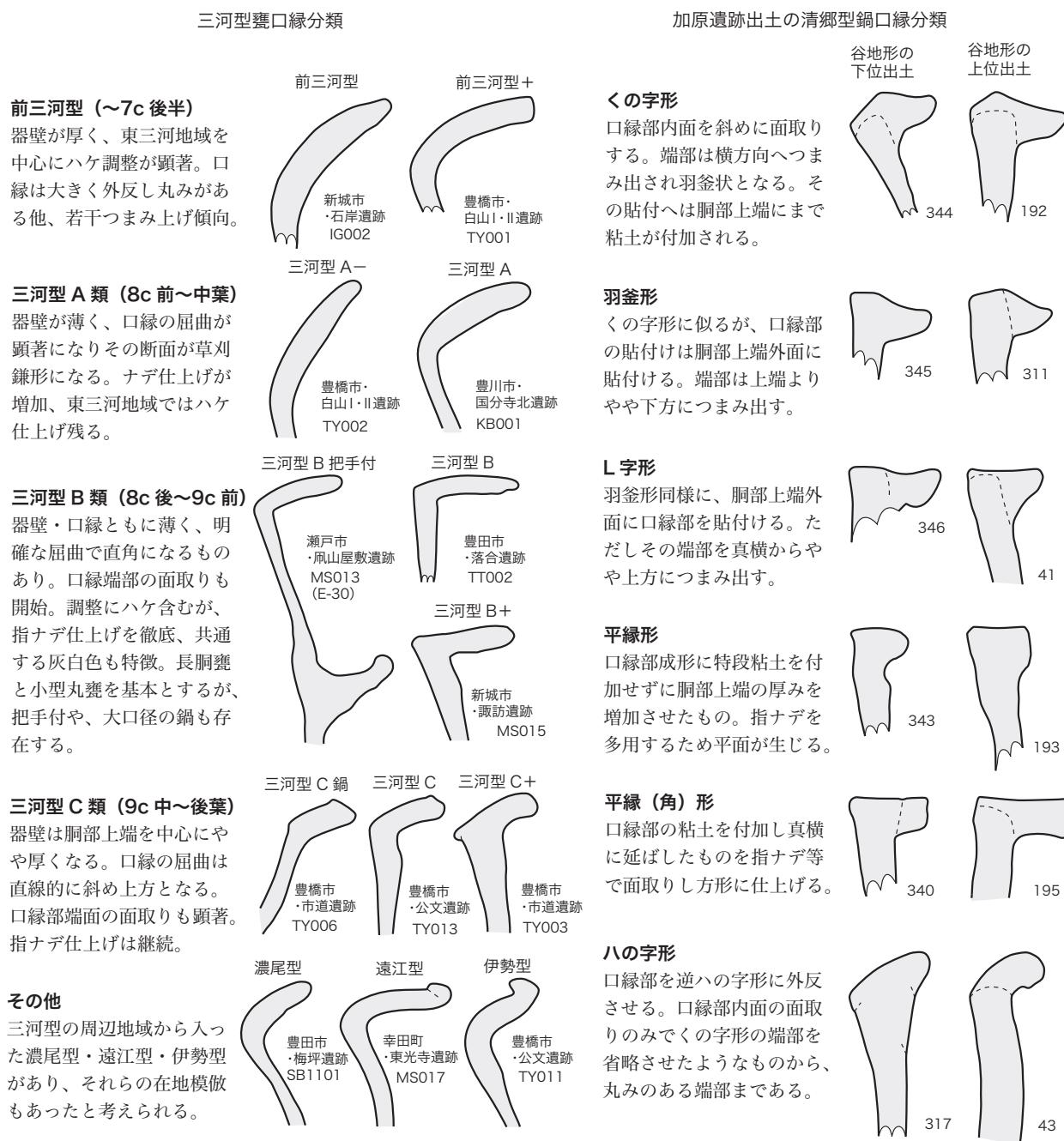


図 63 三河型甕と清郷型鍋の口縁分類図

**清郷型鍋の分類** 一方、清郷型鍋（甕）は、岩野見司が愛知県一宮市・清郷遺跡の出土資料を基準にして、灰釉陶器と共に伴する特徴的な字形口縁部の土師器甕の型式を設定したことに始まる〔岩野 1974〕。同型甕は、既に新城市・馬場遺跡の堅穴状遺構（後述）でも出土したこと、尾張・三河両地域に存在することが確かめられていた〔岩野 1967〕。その後、佐野五十三〔佐野 1990〕による静岡県内での事例集成によって遠江・駿河国域にも分布が確かめられた他、伊勢国域北部を中心に出土例が知られるようになった。永井宏幸〔永井 1996〕は岩野の分類を再整理・追加してA～G類まで区分し、三河型甕の系譜を引く一群と西日本の羽釜に影響された一群の存在を指摘し、造り付け竈と長胴甕の終焉を結び付けながら当該煮炊具を鍋形として位置づけたのである。近年では、三河湾沿岸の幡豆郡に所在する寄名山遺跡で大量に同型鍋の出土が確認されており〔吉良町 2008〕、清郷型鍋分布の中心が三河国域にある可能性が高まっている。

以上の先行研究を受けて加原遺跡出土の清郷型鍋を分類する。しかしながら、三河型甕に比べて規格性の高さではばらつきの大きい点が指摘される。しかし口縁部成形方法の特徴により6つに分類し、このいずれかにあてはめていくことが可能である。清郷型の最も特徴的な口縁は全形がくの字形になるもので、胴部上端の上から外側へ口縁部粘土を貼付け、最大の特徴は内面に斜めの面取りを施していることである。これは口縁端部のつまみ出し位置が上下しようとも変わらず、一貫したものとして捉えられる。このタイプはこれまでの指摘どおり三河型甕、特にC類の器壁が厚くなったものと解釈できよう。

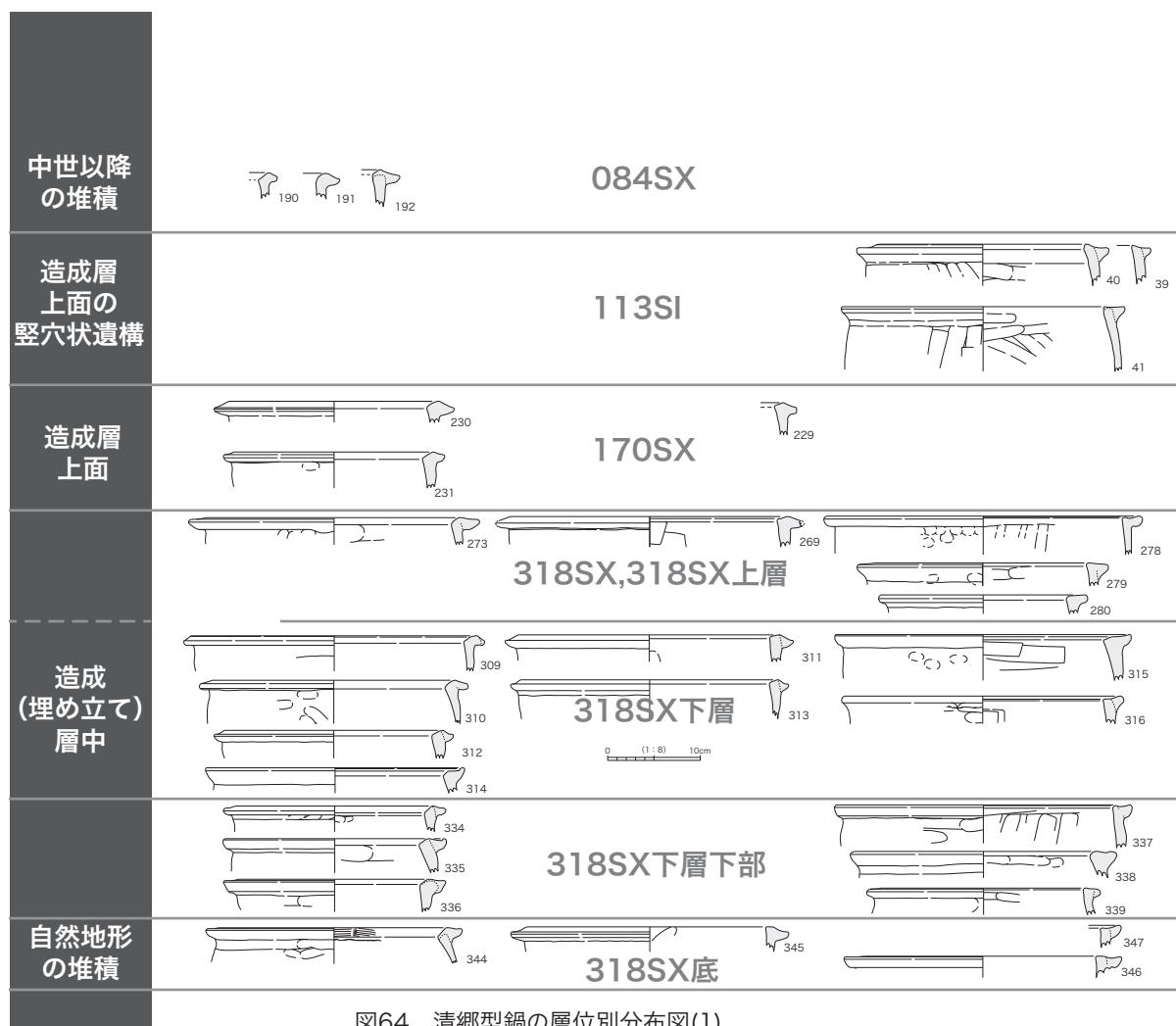


図64 清郷型鍋の層位別分布図(1)

くの字形以外では、上端内面の面取りのない羽釜形がある。外面に口縁部を貼付けるもので、横方向へつばが張り出したような形状となることからこの名を付した。また、口縁部上面を平らにする傾向のものとしてL字形・平縁形・平縁角形がある。L字形は羽釜形と角度によっては違いが少ない。一方平縁・平縁角形は口縁部を方形につくり、口縁部上面が真横に展開する点が特徴となる。最後に今次発掘調査でいくつかの形態がみられたハの字形は、ほとんどくびれのない口縁部となっており、特にこのタイプに限ったことではないが、胴部の粘土帶接合痕が明瞭にみられる程度の粗雑な指ナデ仕上げがあるので、調理用ではなく、何らかの作業用具の一種ではないかとも考えられる。

**清郷型鍋の層位別分布** そして上記の分類で、清郷型鍋が最も出土している谷地形での状況を層位別みてみよう。ただし谷地形の堆積は最大でみても12世紀中葉から後葉にかけてのもので、それほど長期間にわたるものではない。また、その堆積も人為的な切り出と埋め立てが関係していると考えらえるので、必ずしも層位学的に時間軸を反映しているものとは言いがたい面もある。しかしながら指摘しうる点として、ハの字形口縁の鍋は比較的上層に多くみられることに注意したい。このタイプの鍋は、器面調整の粗雑さから作業用具の可能性を考えているが、谷地形周辺での各種作業工房が発達してく中で使用と廃棄量が増加したものであったとすれば、自ずとそれは下地となる造成の後になる。これに対して、くの字形のタイプが上層では小片に限られる点は、当該鍋の用途と変遷を整理する上で鍵になる事項であるといえよう。

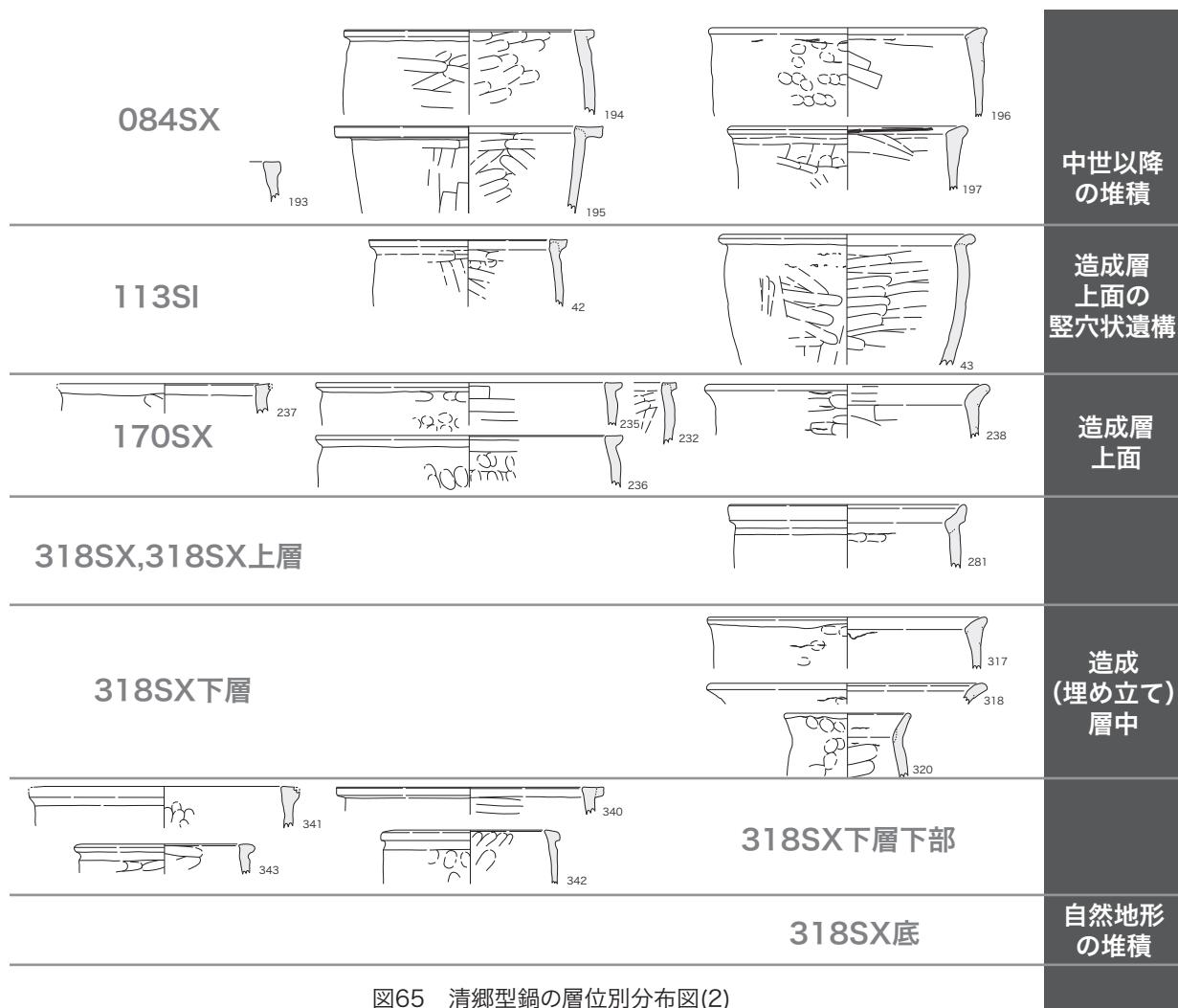


図65 清郷型鍋の層位別分布図(2)

### 胎土分析成果から 胎土分析の成果は、新たに興味深い事実を示すこととなった。

第1点は、清郷型鍋の胎土について、58点中51点という高率で花崗岩質の砂粒（B群）を含む共通性を示したことである。また、淡水成粘土に堆積岩類（C群）という組成で5点がまとまっていることも注意される。このことは、後述する三河型甕が時期によってはばらつきを示しているのを参照すれば、いかに材料粘土が限定的であるかを物語っている。ことに断層ガウジに分類される粘土、あるいは斑れい岩質砂粒を含む海成粘土を材料とする御山寺遺跡出土資料（MS011）の存在は、その出自が幡豆郡域に限定可能な見通しを与えてくれる。

第2点は、東三河地域の三河型甕の材料粘土を通時にみた場合、三河型A類とした8世紀前～中葉の段階ではばらつきが大きく、器形の規格性が高くなったものの粘土がさまざまな環境から入手されていたことが示されたことである。これは単純化すれば、多様な製作場があったことを推察させるものである。これに対して典型的な三河型であるB類の段階では、清郷型と同様に花崗岩質の砂粒（B群）を含むものに限定される。しかし粘土は判明した範囲において圧倒的に淡水成が主体であり、これは西三河地域の三河型甕を分析した先行成果に近い。ただしこのような淡水成粘土は西三河地域に限定されるものではないことから、東三河地域にも拠点的な製作場があった可能性がある。

第3点は、三河型から清郷型への移行期に、再び材料粘土のばらつきがみえることである。具体的にはC類・C類+が相当する。少なくともB類段階の淡水成粘土への集中は看取されない。しかしながら明らかにC類段階で断層に関わる粘土を使用は今回の分析で検出できなかったことから、清郷型鍋の製作が開始されてから粘土採取地（あるいは製作場そのもの）が移動したという見通しを立てておきたい。すなわち清郷型の成立は、三河型製作者とその環境の中から始まったものと仮定される。

## 第3節 古代設楽郡の設置と莊園時代の開始

**山間部の古代集落** 以上2節にわたって加原遺跡をめぐって、集落と土器の2方向から考察を深めてきた。要点としては、8世紀中葉に一旦途絶した集落が9世紀後半より再開し、12世紀代になって大規模な造成工事を伴って最盛期を迎えることが指摘される。尾張・三河国域における古代集落の動態については、西三河地域や尾張東部（瀬戸）地域では8世紀後葉以降に山間部への進出が顕著になる〔永井2013〕。これらは、従前の平野部集落からの延長ともいえる変化であり、これに対して、例えば三河国額田郡域にある豊田市・下山地区では、それまで須恵器がほとんど出土しない地域において、9世紀後半の灰釉陶器や三河型土師器甕が出土する堅穴建物（堅穴状遺構）に限定される集落遺跡が近年の発掘調査であきらかになってきている〔鈴木2014・武部2014〕。その具体的評価については今後成果が整理・公表されていく過程で行っていく必要があるが、縄文時代晚期以来ほぼ集落が経営されていなかつた地域に、突如として多数の集落があらわれる様子はきわめて特異な現象であるといえよう。

**設楽郡の古代集落** それでは加原遺跡の属する設楽郡域ではどのような変動があるのだろうか。こちらはさらに不明な点が多く、旧街道に沿って横穴式石室古墳のある地域や8世紀代の須恵器が出土して古代集落と目される遺跡がいくつもあることは事実である。しかしそれに対して縄文土器に次いで灰釉陶器が採集される遺跡が多数あることも事実で〔永井2013〕、豊田市・下山地区のような展開をみせる可能性も充分考えられる。加原遺跡は平野部との関係でいえば連続性のある立地であることから、単純にこれらと同列に扱えないものの、第1節で指摘したように河川に沿った交通路の分岐点にあってより谷奥（山間部）との物資交流にふさわしい立地でもあり、山間部集落の消長と連動している可能性は高い。

しかもこの集落消長は、『延喜式』近世写本の頭注にあるように、宝飯郡から設楽郡を割いて置いた